



net one report 2025

ネットワンシステムズ株式会社

〒100-7025 東京都千代田区丸の内二丁目7番2号 JPタワー
<https://www.netone.co.jp/>

発行：2025年9月

ネットワンシステムズ株式会社

世界最高レベルの ネットワークの提供を通じて 「豊かな未来」を創造します

ネットワングループはICT社会を支える誇りと責任を持ち、
企業として継続した成長のもと、
ステークホルダーの皆様と共に豊かな未来を創ります。
私たちは、伝統と革新に挑み続けた叡智を結集し、
必要な存在であり続けることをお約束します。

01 未来のために

過去から学び、先を読む
価値を見極める目利き力



Purpose 志 大義

人とネットワークの持つ可能性を解き放ち、
伝統と革新で豊かな未来を創る

Part 01 未来のために

- 01 Purpose / Contents
- 03 社会のネットワーク化とネットワンのあゆみ
- 07 事業の変遷
- 09 ネットワンが創る豊かな未来

Part 02 未来を創る

- 11 Mission / Vision
- 13 経営メッセージ
- 19 技術メッセージ
- 23 共創ストーリー

Part 03 未来へあゆむ

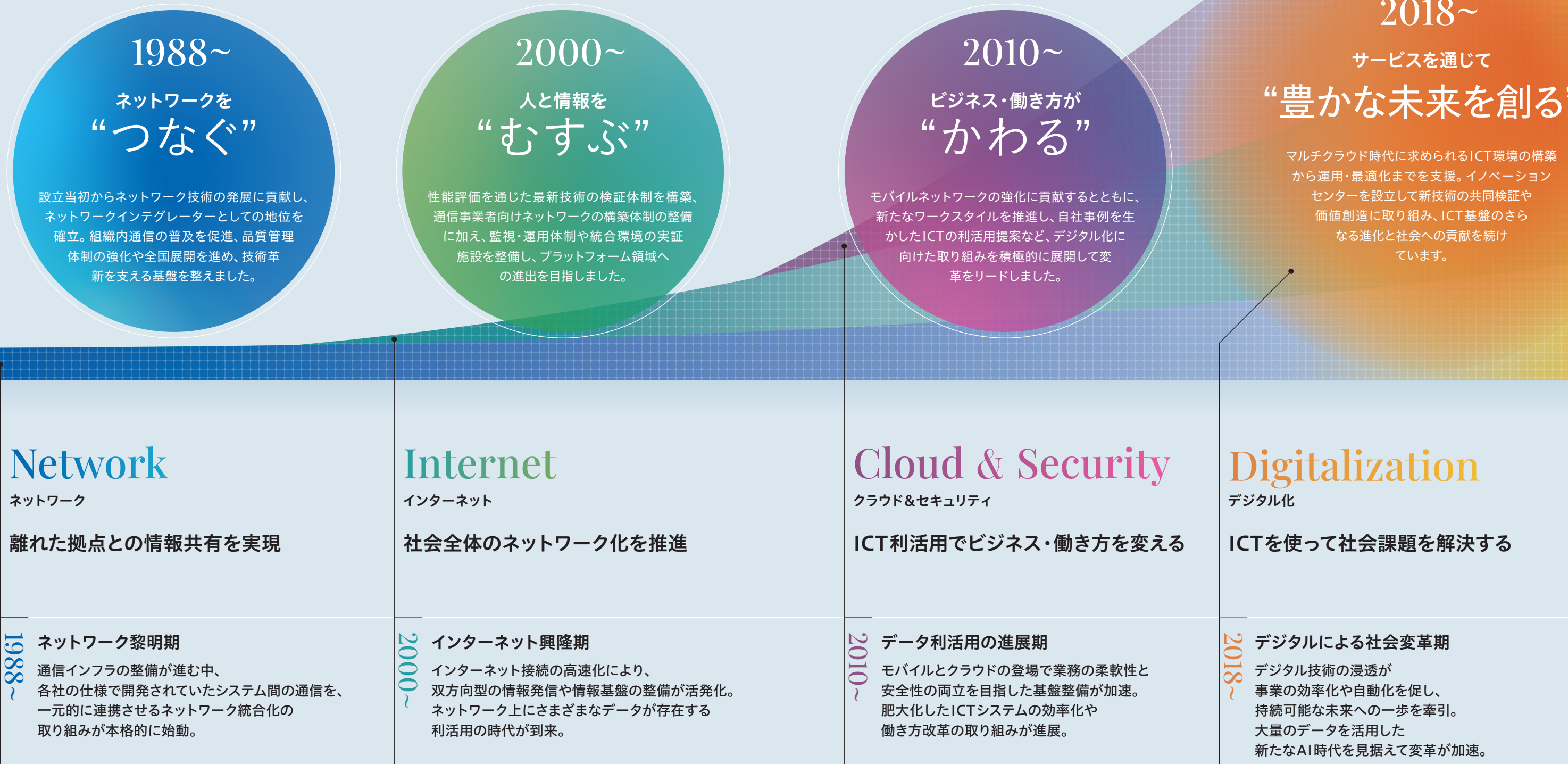
- 27 Values / WAY
- 29 社員座談会
- 33 これからのネットワンに期待すること
- 35 未来への指針
- 37 写真でたどる、ネットワンの軌跡

編集方針

『net one report 2025』は、ネットワングループ(以下、当社グループ)が掲げるPurpose実現に向けた現在地と今後の挑戦をお伝えする冊子です。Part 01では、これまで培ってきた独自性や強み、提供してきた価値を振り返り、私たちの存在意義を明確にしました。Part 02では、未来に向けたビジョンと、それを実現するための技術革新の方向性を示します。Part 03では、企業文化を再確認し、未来に向けて新たな一歩を踏み出す決意をお伝えします。過去・現在・未来をつなぐ価値観とテクノロジー、そして社会と共にあゆむ姿勢を通じて、変化の時代における当社グループのさらなる挑戦と成長に、ぜひご期待ください。

社会のネットワーク化とネットワンのあゆみ

当社グループは1988年の設立以来、ネットワーク技術の進化を追求し続けてきました。
デジタル化の進展や生成AIの登場により、今やネットワークはデジタル社会に不可欠なインフラになっています。
仮想化やセキュリティなど多様な技術と連携し、新たな可能性を広げることで、社会の発展に貢献しています。



各時代のトピックスと強み



1988
ネットワンシステムズ設立。まだ「ネットワーク」という言葉すら知られていない中、ネットワーク専業で事業を展開し、ネットワーク社会の発展を予見しました。



1989
シスコシステムズ社製マルチプロトコルルータの国内独占販売を開始。これにより社会のネットワークシステムの構築と拡大に大きく貢献しました。



2000
海外製品を評価するテクニカルセンターを開設。現在も最新技術の評価・検証を担う国内最大級のネットワーク技術研究施設として体制を整備しています。



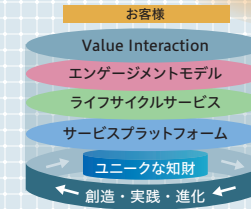
2003
通信事業者の回線増強に向けたネットワークソリューションを提供。高速・大規模・大容量ネットワークの構築に参画し、サービスの提供を支援しました。



2010
通信事業者が提供する4G/LTEサービスの開始に向け、高速で信頼性の高い通信環境の構築を支援し、モバイルネットワークの強化に貢献しました。



2013
いつでもどこでも働けるワークスタイル変革を推進し、自社導入を積極的に推進。そこで得た知識と経験を知財としてICTの利活用提案を展開しました。



2018
ICT基盤全体を支える統合サービス事業を発表。マルチクラウド環境の構築・運用、カスタマサクセスサービスを通じた全体最適化の支援を開始しました。

2022
「ネットワークのリーディングカンパニー」としての地位の確立を目指し、理念体系を刷新。ICTの利活用を通じた社会課題解決の実現を宣言しました。



1990
品質管理センターを開設。製品の品質検査や保守部材の管理を強化。現在では17,000m²の敷地面積を有し、全国規模で保守部材を提供する体制を整えています。



1995
米国現地法人「Net One Systems USA, Inc.」を設立。シリコンバレーのエコシステムに加わり、リアルなICTシステムの姿を日本へ伝えるべく活動を広げています。



2007
ネットワークの監視と運用を支援するエキスパートオペレーションセンターと音声とデータのネットワーク統合を見据えたUCデモルームを開設しました。



2008
電話、ビデオ、データを統合するユニファイドコラボレーション、クラウド時代を見据えて仮想化技術によるプラットフォーム事業へ領域を拡大しました。



2016
セキュリティオペレーションセンター開設やセキュリティクラウド構想、スマートファクトリーやMSP*の支援などデジタル化に向けた提案を開始しました。* Managed Service Provider



2017
ICT基盤を機能として提供するサブスクリプション型サービス「NetOne “all in” Platform」を発表。ICT基盤を“所有”から“利用”する時代を見据えて国内初の提案を開始しました。



2023
イノベーションセンター「netone valley」を開設。最新技術の検証とコラボレーションを通じて新たな価値を創造し、持続可能な社会の実現を目指していきます。



2025
ネットワークは人・モノ・場所を結びつける基盤として不可欠です。私たちは、時代に応じた技術革新に挑み続け、豊かな未来を創造します。

各時代で培ってきた強み

ネットワーク構築の先駆者として技術革新を牽引

日本でのインターネット普及に向けた技術啓発と品質改善に加え、拡張性や相互接続性の高いシステム構築を推進。技術革新を見極めながら先進技術を利用・応用し、時代に適したネットワークシステムを提案。実際の利用環境を想定した機能検証や導入後のサポート体制を整備し、障害対応を含む動作保証の精度を高めることでお客様に安心を提供してきました。

リーディングベンダーとの連携と独自技術で進化を加速

ネットワークを活用したクラウドシステムへの移行に着目し、日本市場向けの製品・サービスの開発を世界のICTリーディングベンダーと共に進め、戦略的パートナーシップを強化してきました。加えて、ソフトウェアベースのハイブリッドクラウドを提唱し、ユーザー視点に立ったシステム変革を実践することで、独自のアーキテクチャーをつくり上げてきました。

DXを支える戦略パートナーとして価値を共創

これまでに蓄積してきた技術的知見とICT利活用のノウハウをもとにインテグレーター型のアプローチを変革し、設計・構築・保守・運用までインフラ全般を包括的に支援しています。さらに、マルチクラウド時代をリードする統合的なサービスモデルを追求し、DXとライフサイクルサービスを組み合わせた次世代システムとその安定稼働の実現を支援します。

共創を支えるプラットフォームで価値を持続的に提供

お客様の事業成長を支える戦略パートナーとして、カスタマサクセスを追求し続けます。netone valleyを共創によるイノベーション推進の場と位置づけ、先進的なデジタル技術とその利活用の知見を融合することで、社会課題を解決する新たなビジネスを創出します。さらに、当社グループの事業活動全体を「共創・共生プラットフォーム」へと進化させていきます。

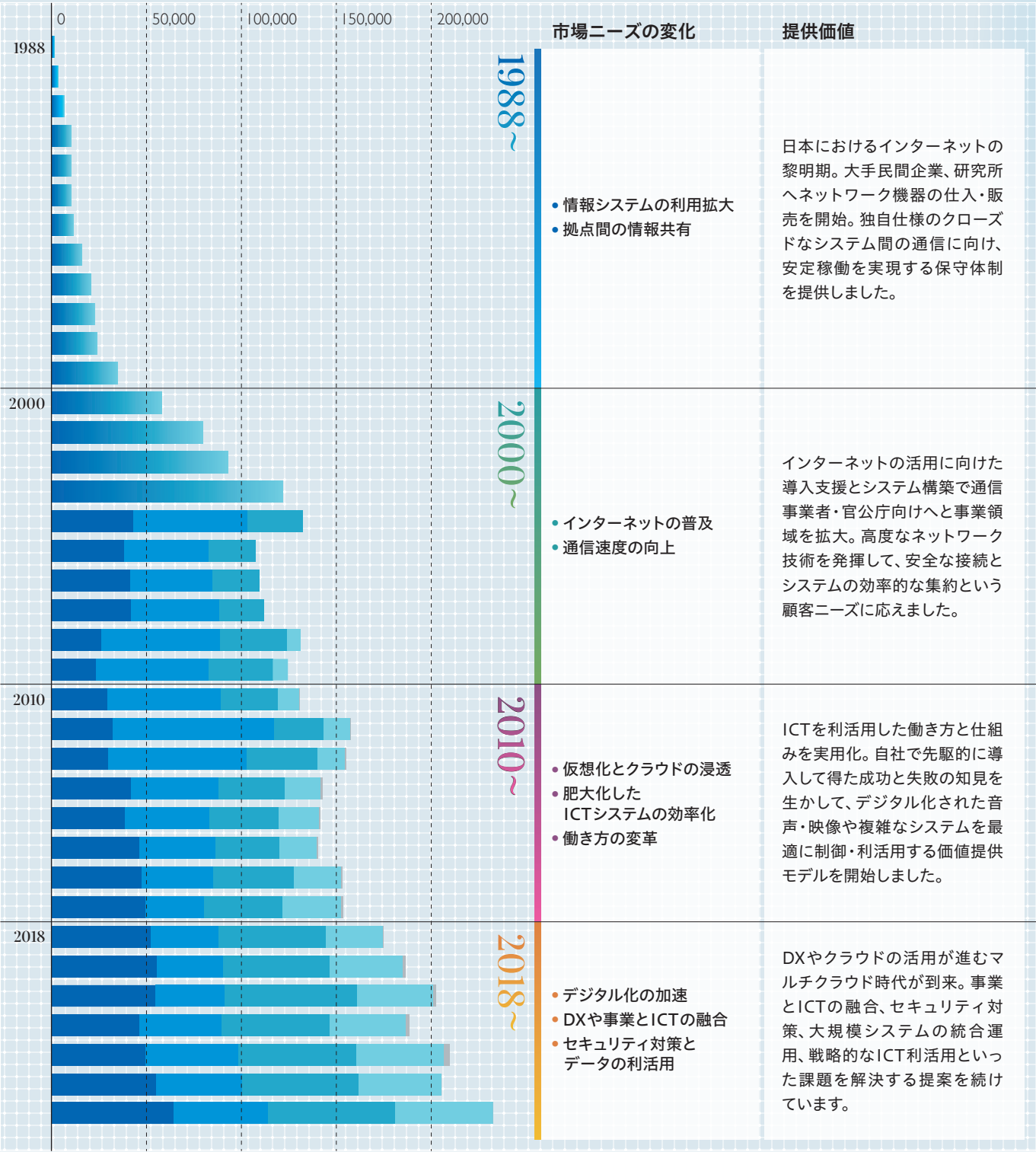
事業の変遷

当社グループは市場の変化をいち早く捉え、技術や性能を中立的な視点から評価・選定し、最適に組み合わせることで、日本のICTインフラの発展に貢献してきました。

これからもICT利活用における課題解決を通じて、お客様の価値創造をご支援していきます。

売上高(百万円)

■ 合計額(2003年度まで) ■ エンタープライズ ■ 通信事業者 ■ パブリック ■ パートナー ■ その他



*売上構成比:2024年度

Enterprise エンタープライズ事業

事業内容

大手民間企業向けに、クラウドを含むICT基盤全体の整備・最適化を支援。働き方改革、セキュリティ対策、工場のデジタル化など多様なニーズに応える提案・実証を推進し、お客様の競争力強化を支援しています。



サービスの変遷

インターネット黎明期から、先進技術を活用したネットワーク基盤の設計・構築、障害対応・保守体制を提供。お客様に最大の投資対効果をもたらす提案を通じて、お客様からの厚い信頼を獲得しています。データ活用や働き方改革が進み、ICT基盤の拡大と高度化・複雑化が加速する中、運用の中で得た多様なノウハウをお客様と共有することで、より柔軟かつ実践的なICT利活用を支援しています。

Telecom Carrier 通信事業者事業

事業内容

通信事業者やISP*の所有する通信網の構築を中心に事業を拡大。近年はクラウドやセキュリティ、5G、DX支援にも注力しています。高度技術を生かした提案で、お客様との共創を通じ、新たなビジネスの可能性を広げます。
* Internet Service Provider



サービスの変遷

インターネット人口の拡大期から30年にわたり、国内有数の大規模ネットワークシステムを数多く構築。最先端技術の検証からメーカー製品の実用化に向けた評価まで携わり、日本の通信基盤の発展を牽引してきました。ICT基盤の多面的な構築技術や知見をもとに、信頼性・運用性に優れた設計と提案力で、通信事業者の多様な課題にも応えています。

Public パブリック事業

事業内容

公共機関向けに、セキュリティ強化や共通基盤整備を実施。行政のデジタル化、教育のデジタル化、ガバメントクラウド接続などを通じて、住民サービスにおけるICT利活用の促進を提案しています。



サービスの変遷

自治体市場では2016年に短期間で抜本的なセキュリティ強化が図られ、行政手続きのオンライン化、クラウド利用、テレワーク促進などICT利活用の要望が高まっています。本質的な課題に対して最適解を導く目利き力と、最適解を実現するインテグレーション力でお客様のDXを支援します。ICTライフサイクル全体を見据え、グランドデザインの策定から運用まで提案し、お客様との関係性を深めています。

Partner パートナー事業

事業内容

情報システムを提供するシステムインテグレーターとの協業を通じて再販事業を展開。当社グループの事業基盤や目利き力、技術力を生かし、パートナー企業と共にDXとサービスシフトを支援しています。



サービスの変遷

多様かつ最先端のメーカー製品を自在に組み合わせることで、お客様のニーズや環境に最適な商材やMSP向けソリューションを提供しています。長年培った技術力とノウハウ、国内有数の規模を誇る施設と技術力をもとに、導入前の品質保証や技術検証、提案支援から、導入後の保守サービスまでパートナー企業をトータルにサポートします。

ネットワークが創る 豊かな 未来

当社グループは、「人とネットワークの持つ可能性を解き放ち、伝統と革新で豊かな未来を創る」をPurposeに掲げ、事業活動を通じて社会課題を解決し持続可能な社会を目指しています。工場におけるスマートマニュファクチャリングの推進や、自治体のデジタルガバメントを支援し、「新たな社会」Society 5.0の実現に貢献します。

データセンター

産業のグリーン化 に貢献



政府による「2050年カーボンニュートラル宣言」から、環境配慮への意識が高まっています。当社グループは、消費電力とCO₂排出量の削減を目指し、ICTシステムの省電力化・効率化や、ICT利活用による人・モノの移動削減などグリーンソリューションを推進しています。さらに、ICT機器の保守延長や再生品販売による廃棄物削減にも取り組み、持続可能なICTインフラの構築を支援しています。これにより、産業界全体の脱炭素化と環境経営の実現に貢献しています。

自治体

行政のデジタル化 を支援



自治体は、デジタル庁の方針に基づき、住民基本台帳などの業務を政府と共通で利用できるガバメントクラウドへ移行することが求められています。当社グループは、ネットワーク接続や最適な共通基盤の設計・構築など幅広く導入を支援しています。さらに自治体職員の業務プロセスと利用状況を調査・分析し、独自の運用サービスを提案し、安全かつ効率的なシステム利用に貢献しています。

会社

暮らしを支える ICT基盤を守る



デジタル環境の安全性と信頼性を高めるために、当社グループはクラウド利用から自社設備の管理・運用やIoT*端末との接続まで、ゼロトラストの実現に向けた包括的なセキュリティ対策を支援しています。マネージド・セキュリティ・サービスでは、SOC(セキュリティオペレーションセンター)が脅威を早期に検知し、迅速な対応を通じてネットワークの安定運用を支え、社会全体の安全・安心なデジタル基盤の維持に貢献しています。

* Internet of Things

学校

学びのDX推進を支援



GIGAスクール構想により、1人に1台のタブレットPCが配布され、学校のネットワークは高速かつ安全性が求められています。当社グループは、大量の同時接続を可能にする校内ネットワークの整備、クラウド利用や教職員のリモートワークを実現するICT基盤構築を支援しています。さらに、サイバーセキュリティ対策やサポート体制の構築、デジタル教科書を活用した共同研究にも参加し、生徒たちが効率的にICTを利活用できる環境の実現に貢献しています。

工場・製造業

製造現場の デジタル連携を支援

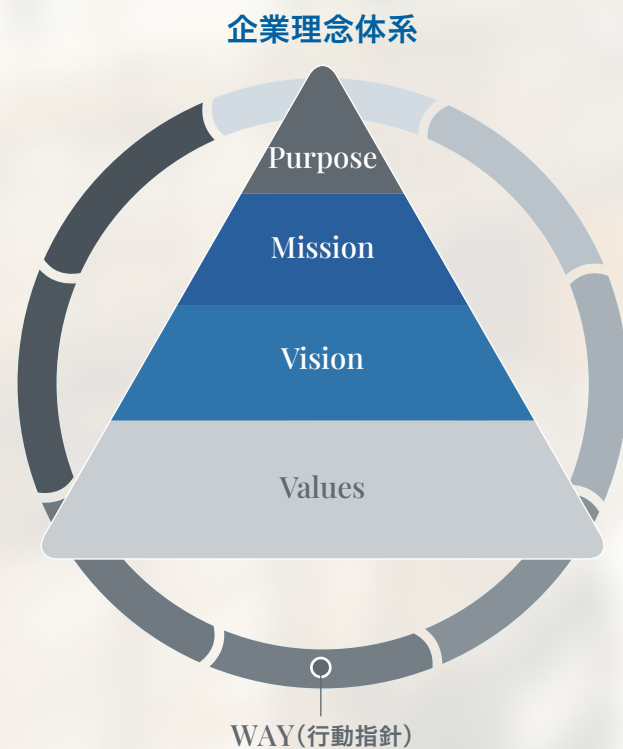


製造業では生産能力や品質向上、需要変動への柔軟な対応が求められています。当社グループでは、製造業のスマートマニュファクチャリング推進に向け、工場のネットワーク最適化やセキュリティ対策、生産性を向上させるIoT基盤の整備、無線化による生産システムの自動化・自律化を支援しています。さらに、デジタル技術を活用した予知保全や柔軟な生産ラインの構築、技能継承など、製造現場のデジタル変革とICT基盤の強化に貢献しています。

02

未来を創る

ありたい姿を描き、
叡智を集結させ、
時代を切り拓く



Mission 使命

我々は、一人一人が卓越した専門性と
高い倫理観を持つプロフェッショナルであり、
社会とお客様の課題解決に貢献する

Vision 目標 Goals

- ネットワークのリーディングカンパニーとしての高い誇りを持つ
- ネットワンならではの付加価値を創出し、継続した成長を実現する
- 絶え間ない自己研鑽で心と技術を鍛える精鋭集団であり続ける
- 幅広いステークホルダーへの責任を果たすため、適切な収益構造を維持する



netone valley

2023年5月、「新しい価値を創造し豊かな未来を切り拓くチャレンジの場」をコンセプトに、イノベーションセンター「netone valley」を開設しました。社会との幅広い接点を生かし、共創を通じて新たなサービスを創出することで、社会課題の解決に貢献していきます。



ネットワークが持つ可能性を信じ、
ネットワークインテグレーターとして社会的使命を果たす



代表取締役
社長執行役員
最高経営責任者（CEO）

竹下 隆史

ネットワークが培ってきたもの

企業としての進化とカルチャー変革で
飛躍的に成長した3年間

前中期経営計画期間(2022-2024年度)を振り返ると、成長戦略を着実に実行し、それを支える経営基盤の強化が順調に進んだ3年間でした。2025年3月期には過去最高の受注高、売上高、営業利益を達成することができ、成長戦略・経営基盤強化の両面で企業として成長することができました。

特に、企業文化の変化では、社員間の連携や相互理解が大きく進みました。具体的には、お互いを認め合い、理解し合うという風土が着実に醸成され、社員自身もその変化を感じています。

私が最も重要だと考えているのは、社員一人ひとりがどのような気持ちで仕事に向き合っているかということです。「何のために仕事をしているのか」を深く考え、志やビジョンを持つことで、成長も考え方も変わってくる。視座を高くして取り組めば、思考の深さや広さが変わるだけでなく、仕事をもっと面白くなり、自分自身の生活も豊かになります。これからも、好奇心と探求心を持って、さまざまなことに挑戦してほしいと思っています。

経験や知見を体系化して伝承する
真のプロフェッショナル集団へ

当社は2022年に「人とネットワークの持つ可能性を解き放ち、伝統と革新で豊かな未来を創

る」というPurposeを策定し、同時にMission、Vision、Valuesを策定しました。その中で、私が最も重視し、社員に意識してほしいと考えているのは、Missionに掲げている「卓越した専門性と高い倫理観を持つプロフェッショナル」です。多くの方はプロフェッショナルと聞くと、その人にしかできない得意分野や特別なスキルを持つ人だと思われかもしれませんが、私は、それはエキスパートであり、プロフェッショナルではないと考えています。プロフェッショナルとは、自分にしかできないことを体系化し、誰もが実践できるような仕組みや体制をつくり上げられる人のことです。特に、私たちの業界のプロフェッショナルは、そうあるべきだと考えています。

Purposeの「伝統と革新」を読み解くと、日本の芸道の「守破離」の考え方が込められています。「伝統」という型を守り、それを極めた後に、革新によって型を破る。そして、型から離れて新しい独自の型ができたときに、必ず体系化して伝承しなければなりません。社員一人ひとりが、このサイクルをしっかりと理解して、日々の業務に取り組むことが、企業価値と顧客価値の最大化につながります。

当社の企業理念の一つであるValues(価値観)には「大切な人に誇れる仕事」という言葉があります。経験や知見を次世代へと継承していく仕事は、誇れる仕事につながります。また、何事からも逃げずに挑戦し続ける姿勢も重要です。伝統に寄り添い、その伝統を継承しながら、革新を繰り返していくことが、組織の真の強みになると考えています。

前中期経営計画期間(2022-2024年度)の成長

	2021年度 実績	2024年度 実績
売上高	1,885億円	2,325億円
営業利益率	8.9%	9.8%
サービス比率	44.5%	48.3%
ROE	15.8%	-

さらなる価値創造を目指して

業務プロセス改革を推進し、
「目利き力」を高める

2025年4月にスタートした新中期経営計画の経営基盤強化では、「企業文化改革」を中心に据え、これに続く重要な取り組みとして「業務改革」に注力します。

前中期経営計画では、経営基盤の強化策として「徹底した見える化」を目指し、その取り組みの一つとして業務プロセスの見える化を進めてきました。2025年度は見える化の成果として横連携を強め、組織力の向上とデータ活用を加速させるためのシステムを導入する予定です。業務の進め方自体を変え、プロセスをシンプルにした上でIT統制も働かせていきます。現在は営業部門が推進役を担っていますが、今後はシステムワークフローの導入によって人が介在しない仕組みに移行します。また、今回のシステム刷新を契機として、社員一人ひとりが小さな改善を積み重ね、目の前のプロセスを見直すことで、「全社員で業務をよりよくしていく」という成功体験へとつなげていきたいと考えています。この取り組みを成功に導くためには、プロジェクトに関わるメンバーだけでなく、全社

員が「自分事」として主体的に捉える意識が不可欠です。業務改革を真に意味あるものにするためには、社員から前向きな意見やアイデアが自然と沸き上がり、組織全体に広がっていくことが決め手になると考えています。

そして、業務改革によって生み出された余白時間を、教育の充実やコミュニケーションの質を高める取り組みにつなげていきたいと考えています。AI活用などによる時間削減の成果は一定の効果を上げていますが、その余白をいかに有効に活用して具体的な成果に紐づけられるかが今後の課題です。

また、新中期経営計画ではこれまでの事業戦略とサービス戦略を「事業・サービス戦略」として一体化し、より最適な商品とサービスを組み合わせる提案に向け、戦略マップを策定して取り組みを明確にしました。これまで課題解決に向けた取り組みをサービスとして体系化し、横展開を図ってきました。今後はサービスを「クリエーション」と「デリバリー」の2つの側面に分けて捉えることも重要です。サービスの原点は常にお客様の近くにあり、現場でのクリエーション、創意工夫こそが価値の源泉になります。デリバリーをパートナー企業と連携して展開することで、サービス提供における役割を分担し、

前工程からのインプットを磨き、
価値のあるアウトプットとして次につなげる

それぞれが強みを生かして価値を高めることが可能になります。こうした協業を通じて、企業間で価値を最大化する新たな価値連鎖の創出が期待されます。

「価値連鎖」のサイクルを広げ、
揺るぎない競争優位性を築く

新中期経営計画では、「価値連鎖」を軸とした戦略遂行による顧客価値最大化を目指しています。この「価値連鎖」は、私が当社の競争優位性を深く探究する中で着想したキーワードです。当社は従来から「目利き力」を強みにしてきましたが、その力がいかに発揮されてきたのか改めて振り返ると、事業活動の各工程において、前工程から受け取ったインプットを磨き上げ、さらに価値あるアウトプットとして次につなげる「価値連鎖」の仕組みによって培われてきたことに気づきました。つまり、「価値連鎖」は目利き力の源泉であり、各工程でより多くの価値を付加していくことは、顧客価値の最大化だけではなく、組織全体としての価値創造力の強化につながります。

私たちの仕事は、インプットとアウトプットが連続するプロセスで成り立っています。このプ

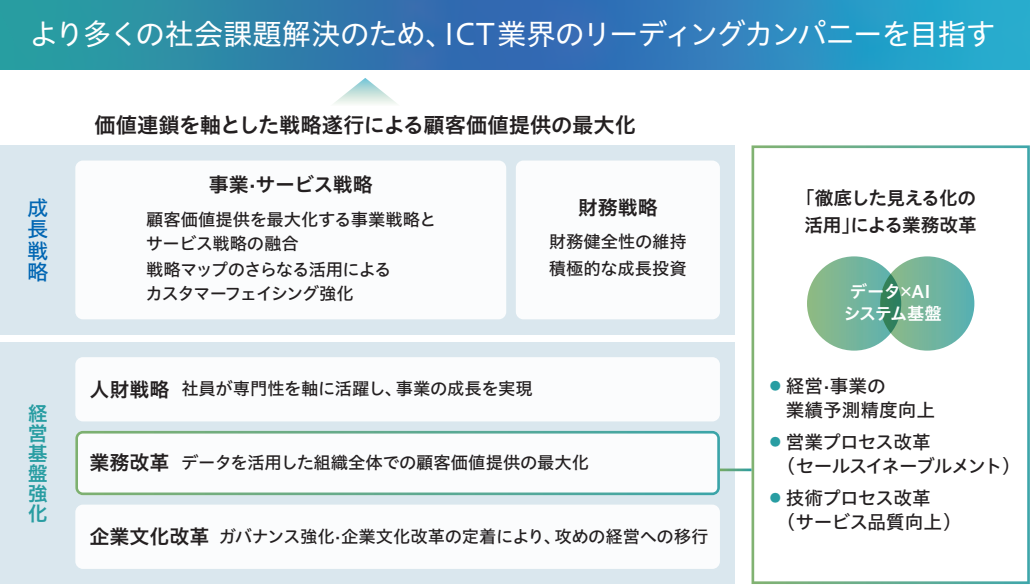
ロセスにおいて重要なのは、本質を見抜く力と、困難を乗り越える知恵や工夫です。価値は、決して突然生まれるものではありません。必ず誰かからのインプットがあり、それを受け取った人が磨き上げ、創意工夫を重ねることで、価値が創出されるのです。社員一人ひとりが「価値連鎖」を常に意識して、目の前のプロセスの改善に当たり前に取り組むようになった時、真の意味での目利き力が発揮できると考えています。そして、このサイクルを継続的に回し続けることで、変化の激しい時代でも揺るぎない優位性を築くことができます。

自分が生み出したアウトプットを磨き、次のインプットの質が高まるサイクルを意識できれば、ワクワクしながら仕事に取り組むことができます。当社のフラットな組織体制と、「何でもつなぐ」という文化は、価値連鎖が浸透しやすい環境と言えます。社員同士の強いつながりを生かし、お互いのミッションを通じて価値を結びつけることで、組織全体としてより大きな価値を生み出していくこと、それこそがWAYで掲げている「お互いに半歩踏み込む」というつながりであり、「価値連鎖」には人との連鎖を大切にしてほしいという想いが込められています。



社員一人ひとりが小さな改善を積み重ね、
全社員で業務をよりよくしていく

経営基本方針



シナジーによって、人とネットワークのもつ可能性をこれまで以上に大きく解き放つ

未来へ、可能性を解き放つ

インテグレーションをさらに強化し、シナジー創出で業界をリードする

私は、DXの遅れが課題とされる日本において、ネットワークの重要性は今後ますます高まっていくと考えています。ネットワーク上にはデータが流れ、その先にはアプリケーションがあります。そのアプリケーションの中でも情報が動き、そこには人が関わってきます。ネットワーク設計においては、このような動線をいかに掌握するかどうかが最も重要です。

今後当社は、データの流れを的確に把握した上で、最先端のネットワークの設計ができるネットワークインテグレーターとして、さらに進化していくべきだと考えています。ネットワークの利用状況を分析することで、経営指標と連動した意思決定が可能となり、迅速かつ確かな戦略を立案できるようになります。さらに先を見据えると、システムのクラウド化やSaaS化が進んでいくことで、基幹システムを含めてネットワーク上のシステムを利用するケースが増えていきます。そうすると、従来のシステムインテグレーターとして活躍していたエンジニアやプログラマーにもネットワークの知識が必

要となります。ネットワークインテグレーターの世界でも、ソフトウェアのオープン化が進むことで、プログラムやコードを書くことが求められるようになります。このように、プログラムを専門としていた人たちの仕事がネットワーク領域へと広がる一方、ネットワークのエンジニアにもプログラミングの能力が求められるようになり、両者の間でスキルの不一致が起きてきます。しかし、このミスマッチは大きなシナジーを生み出すチャンスでもあります。システムの個別開発に従事していたプログラマーがネットワークのコードを書けるようになれば、ネットワークエンジニアの母数が大幅に増加します。また、ネットワークエンジニアがプログラムを書くようになれば、品質管理の視点が非常に重要になるので、プロジェクト管理や成果物の精度を高めるためのノウハウを習得する機会が広がります。

SCSKとの経営統合は、このようなエンジニアのシフトやスキルの変化も見据えたものであり、そこで生み出されたシナジーは人とネットワークの持つ可能性をこれまで以上に大きく解き放つ力を持っていると考えています。

ネットワークという最重要インフラを、つくり、守り、磨いていくという使命を果たす

最後に、我々のビジネスの社会的価値についてお話しします。近年の社会は、変化が非常に激しく予測困難な環境が続いています。そのような時代だからこそ、私たちのビジネスの価値はますます高まっています。

災害発生時を例にとると、発災直後には通信ネットワークの重要性が非常に高まりますが、時間の経過とともに人々の生活に直結する電気、ガス、水道の重要性が高まる傾向があります。しかし、実際には電気やガス、水道にもICT技術が広く活用されていて、それらを支えるネットワークの安定稼働が不可欠な要素になっています。そうした点を踏まえると、現代においてはネットワークこそが極めて重要なイン

ネットワークの可能性の拡大



* Cyber-Physical System

フラであり、その重要性は今後ますます高まっていくと考えています。

当社は、この最重要インフラをつくり、守り、磨いていくという使命を担っています。社員には、そうした使命を持つことによる面白さを知ってもらい、当たり前と思うことにも一段レベルを高めて取り組んでもらいたいと考えています。志を持って仕事をしている人は成長します。

WAYの中で一番人気のある「ワクワクを広げる」という言葉のように、自分のアウトプットにもっとワクワクしてほしいと考えています。一方で、ワクワクがまだ仕事と結びついていない一面もあります。自分のアウトプットのその先を想像し、ワクワクできれば、一人ひとりの成長につながり、会社はもっと成長していきます。私はこうした連鎖を「仕事の本当の楽しさ」として伝え、社員の皆さんのワクワクをさらに引き出していきたいと思っています。

最後に、お客様、そしてパートナー企業の皆様にお伝えしたいのは、当社は人のつながりと同様に、企業間のつながりも大切にしているということです。私たちは、これからも価値連鎖の中でパートナー企業の皆様と共にプロセスを磨き、社会課題の解決に取り組んでいきたいと考えています。

自分のアウトプットのその先を想像しワクワクを広げることが成長につながる

国内屈指の 技術と人財力で ネットワークの未来を切り拓く



執行役員
ビジネス開発本部長

藤田 雄介

すべての進化はネットワークから 当社が果たすべき使命と挑戦

私がネットワークの面白さに気づいたのは、前職でのある出来事がきっかけでした。お客様に初めてネットワークを導入して「問題なく稼働できた」と安心していただけ、数時間後にまさかのトラブルが発生して停止してしまったのです。その時、「ネットワークは、まるで生き物のようだ」と感じ、それが魅力として心に強く残りました。当社に入社してからも、その想いはずっと変わらず持ち続けています。

最近では、生成AIなどの新しいテクノロジーが次々に生まれ、流れるデータや用途に変化が生まれ、技術革新によってネットワークの役割も進化しています。すべての中心となるネットワークはまさに生物のように進化し続けており、それに呼応するようにお客様の課題も変わり続けています。また、近年では、デジタル技術をいかに活用して事業を加速させていくかが、企業の成長を左右すると言われています。しかし、日本は2024年の世界のデジタル競争力ランキングで31位と、デジタル化の必要性を感じているものの、デジタル化の進展に課題が残っているのが現状です。加えて、ネットワークを含めたICTインフラの運用委託業務が、2023年からの2年間で倍増すると言われていますが、委託先のICT人財不足などがネックとなかなか委託先が見つからないことも、デジタル化の妨げの要因となっています。

経済産業省が2016年に公表した調査によると、日本国内のICT人財は2030年に、79万名不足すると試算されています。ICTの中でも、特にネットワーク分野は専門性が非常に高いことに加えて、トラブル時の社会的なインパクトが非常に大きいため、安全性・安定性が強く求められ、そのために高いスキルや幅広い知識が必要になります。こういった課題を、事業を通じて解決していくことこそが当社の仕事であり、国内No.1のネットワーク企業の使命であると考えています。

ネットワークは技術の進歩と共につながる対象や流れるデータが多様化し、その複雑さが増す

複雑化するネットワーク社会に 堅牢かつシンプルなソリューションを提供

今や、私たちの生活はネットワークなしには成り立ちません。例えば、モノづくり、流通、販売に関わる情報、さらには日々の金銭のやり取りまで、その多くがオンラインで行われ、日常的な情報の伝達もほぼすべてがネットワークを介して行われています。自動車、電車、飛行機といった交通輸送網でも、ネットワークは幅広く活用され、人々の生活に深く浸透しています。ほんの10数年前であれば、さまざまなサービスでネットワークトラブルが発生してもその影響は限定的でした。しかし、今はネットワークが止まったら、人々の生活や企業活動に大きな影響を与えてしまうため、ニュースでも大きく取り上げられることが当たり前になっています。

同時に、ネットワークは技術の進歩とともにつながる対象や流れるデータが多様化し、その複雑さが増しています。企業のオフィスで使われているネットワークと、生成AIのデータセンタに必要ネットワーク、製造業の生産ラインで使われるネットワーク、そして車の自動運転のためのネットワークは、それぞれ形態や扱うデータが全く異なるので、一辺倒のネット

ワークでは対応ができません。複雑なシステムだとネットワークやセキュリティを制御するのに約10万行のコードを設定する必要がありますが、今は、それを数万台の機器に設定し、その整合性を人が確認しています。接続先や流れるデータの種類が増えれば増えるほど、この複雑さはさらに増していくばかりです。また、セキュリティについても、人の振る舞いに対するセキュリティから各種ソフトウェアのセキュリティまで多岐にわたる要素があり、ネットワークの形態やデータの種類と組み合わせると、さらに複雑性が増していきます。

こうした課題に対応し、安全かつ安定して、しかも人手をかけることなくネットワークを構築・運用して解決していくためには、高度な専門技術をいかにシンプルにしていかが重要です。当社は、長年にわたって技術と実直に向き合い、これまでに非常に大規模なネットワークの構築・運用を数多く手がけてきました。今後、そこで培った知見や経験をデジタル化して再利用し、さらにAIやさまざまなデータも活用しながら、ネットワークの設計・構築・運用で実施する内容を、より堅牢かつシンプルにしていきたいと考えています。

戦略マップと技術戦略

市場		エンタープライズ	通信事業者	パブリック	パートナー
事業セグメント戦略	A	サービス戦略 先進技術で新たな収益獲得 商材: 先端技術			技術戦略 先端技術力強化による新たな収益獲得の挑戦
	B	サービス収益(ストック)の拡大 商材: コンサルティングサービス、自社クラウドサービス、運用サービス、セキュリティサービス、XaaS			技術活用力強化による売上と利益の向上
	C	品質向上による市場占有率拡大 商材: 機器販売、導入支援、保守、ベンダーサポート			基礎技術力強化による市場占有率の拡大

市場に対応した技術戦略で、 お客様への提供価値を最大化

現在、当社では、2024年に策定した「戦略マップ」と連動させながら、顧客価値の最大化に向けた技術戦略を進めています。戦略マップでは、市場と私たちが提供する商材・サービスをクロスオーバーさせることで注力領域を明確化していますが、そこにカテゴリごとの技術戦略を連動させていく方針を取っています。（P.20「戦略マップと技術戦略」参照）

まず、戦略マップCの機器販売、導入支援、保守などの分野では、品質向上と標準化を目指しています。はじめに品質を向上させることで、当社ならではの強みを既存のお客様にしっかりと提供していきます。さらに、標準化はより多くのお客様に当社のサービスを提供するためのカギとなるため、いかに標準化して効率アップを図りながら品質を向上させていくかが重要です。

次に、戦略マップBについては、長期間にわたってお客様のシステム運用を担うストック型サービスを拡大していきます。顧客接点をより強化していけば、収益の継続性を高めることになり、結果として当社全体の安定性を高めることにもつながります。

そして、戦略マップAの先端技術については、日々進化し続けるさまざまなICT技術を確実にキャッチアップし、それを当社がこれまでに培ってきた知見と組み合わせ、お客様にいち早く提供することを目指しています。

この三つの軸と合わせて、AIやデータの活用によりシンプル化・自律化・自動化を実現していくのが全体の技術戦略です。

ネットワーク起点で複数スキルを獲得 次世代エンジニアに求められる知見と進化

技術戦略を進める上で、人財の育成と強化は不可欠です。現在、当社では、社員一人ひとりのスキルレベルと専門領域を一目で把握できる「スキルマップ」を活用し、計画的な育成に取

り組み始めています。

ネットワークのエンジニアは、ネットワークを起点として、そこにつながる技術を学ぶことができます。私自身も、ネットワークを中心に据えながら、さまざまな技術要素を取り入れることで知識やスキルを磨いてきました。とりわけ生成AI時代においては、多角的なスキルセットを求められますが、ネットワークを起点にすることで、この時代に求められる知識やスキルを効率よく身につけることができます。米国のICT企業では一点突破型で専門性を高めていく人財が多い一方で、日本企業の強みは、インフラだけでなくアプリケーションも含めたお客様体験までトータルで提供できる点にあると考えています。とくに生成AI時代においては、複数のテクノロジーを扱える人財の価値がさらに高まっていくと考えています。

また、私たちの業務フローには、コンサルティングから提案、設計、構築、保守運用という一連の流れがありますが、今後はコンサルティングから提案までの「前工程」を担うエンジニアと、安定稼働を実現する「後工程」を担うエンジニアの重要性がさらに高まります。現状では、ICT業界全体で前工程が重視される傾向があり、それが後工程の人財不足やデジタル化の遅れにつながっている側面があります。当社としては、前工程と後工程を両輪とすることで、お客様のシステムを安定稼働させる中で出てきた課題を確実に拾い上げ、保守運用からコンサルティングにつなげるサイクルを生み出していく。これが私たちの勝ち筋の一つであり、そうしたサイクルを見据えたエンジニアの育成やスキルシフトを進めていく方針です。

さらに、人財の配置や教育においても、これまでの知見をデジタル化してシンプル化を進めていきます。これによって、教育の効率化につながるだけでなく、人財配置においても専門性の高い領域とそうでない領域での役割分担がより効果的に実施できるようになると考えています。

私たちは自身がICT・ネットワークの新たな未来を切り拓けることに期待が膨らむ

新たな挑戦への機会が到来、 技術力を磨き、未来を拓く

当社での先端技術の活用として大きく二点あり、一つは、デジタルツインによる検証を通した安全性・安定性の追求。もう一つは、データやAIを活用した自律化や標準化を含めたシンプル化です。

当社は、ネットワーク領域では国内No.1の技術力を持っていると自負しており、非常にレベルの高いエンジニアが多数在籍しています。そうした高い技術力と専門性を持ったエンジニアたちが、実直に技術と向き合いながら安全性と安定性を追求し続けることはもちろん継続していきます。同時に、インフラ領域のシンプル化を推進し、仮想空間での体験やソフト開発と連携したAI活用などお客様の事業により深く関わる分野まで領域を拡大し、持続的な成長を目指します。

さらに、未来に向けて、経営統合を行うSCSKとのシナジーも創出していきます。例えば、セキュリティの観点で言えば、ICT基盤はもちろん、製造業やソフトウェア開発のサプライチェーン、さらにはモビリティなど、当社が培ってきたセキュリティ技術をより幅広い領域に展開していけると考えています。また、ネットワーク領域においても、国内のネットワークを牽引してきた企業の使命として、運用の自律化を実現し、両社が手掛けるシステム全体の価値を高めていくとともに、その仕組みをグローバルに展開することも視野に入れていきたいと考えています。

最近、私がよく考えているのは、ネットワークの未来です。例えば、東京・大阪間がどれくらい遠いのか、近いのかを表現するとき、距離よりも移動時間で表現することの方が多くなっています。また、「タイパ(タイムパフォーマンス)」という考え方が広まっているように「時間」を重視する傾向がいつそう強くなってきています。こうした変化には、ネットワークの普及・進化によって、コミュニケーションのリアルタイム性

が向上したことが大きく影響していると考えています。これまでネットワークは、私たちの行動や思考を大きく変えてきました。今後、ネットワークがさらに進化し、そこにデータやAIの活用が加われば、リアルタイム性がさらに高まり、タイムラグがなくなるだけでなく、未来予測も加味しながらコミュニケーションをとっていく時代が来るのではないかと想像し、期待を膨らませています。

私はテクノロジーが好きで、その進化を見続けたいという想いで、ICT業界でキャリアを積んできました。今回の経営統合を機に、当社とSCSKが緊密に連携・連動していけば、テクノロジーの進化を見るだけでなく、私たち自身がICT・ネットワークの新たな未来を切り拓けるのではないかとワクワクしています。

すべての社員と共に、豊かな未来を切り拓いていくために、これからも技術と真摯に向き合い、共に知見やスキルを磨き続けていきたいと考えています。





「netone valley」から「未来」へ イノベーションと想いをつなげる

新たな価値を生み出し、新しい未来を切り拓くネットワンシステムズ。今後、私たちの技術はどのように磨かれ、どう発展していくのか——目指す姿である“人とネットワークの持つ可能性を解き放つ”を体現するために、「共創」をテーマに挑戦を続けるイノベーション推進部のメンバーに話を聞きました。

Why?

なぜ共創が必要なのか？

近年、社会が多様化・複雑化し、企業が社会課題を単独で解決することは難しく、パートナーとの「共創」が不可欠になっています。その一方で、行きすぎた「競争」によって重要な社会課題が解決されず、世界が危機に陥りかねない懸念も生まれています。私たちネットワンは、30年以上にわたってネットワーク分野を専業として、最先端領域でビジネスを展開してきました。しかし現在、ネットワーク上のデータ活用や生成AI分野における技術進歩が格段に速まっています。そのため、技術のキャッチアップはもちろん、経営資源の観点からも、外部の企業・団体とのリレーションシップがより重要になっています。

Members



ビジネス開発本部
イノベーション推進部
部長
門脇 広平



ビジネス開発本部
イノベーション推進部
技術開発チーム
マネージャー
織原 卓司



ビジネス開発本部
イノベーション推進部
技術開発チーム
シニアスタッフ
本間 あや

デジタルイノベーション 共創ビジョン



門脇「昨今の社会環境や事業環境の変化を踏まえると、外部との関係では、まずはビジョンや想いを伝え合い、共通認識を構築した上で、健全な『競争』によって互いに高め合っていくことが重要だと考えています。さらに、志や認識を共有できるパートナーの皆様との『共創』の推進が必要不可欠です」

このような考えのもと、当社は「ネットワークの力で、世界に創造力を」をコンセプトに掲げ、デジタルイノベーションを推進しています。

織原「ネットワークはデータを運ぶた



めの単なる情報の通り道ではありません。『技術と人』、『人と人』、『価値と価値』をつないで、新たな可能性を見いだすための“創造のインフラ”として捉えています」

現在、イノベーション推進部は、安全で柔軟かつ未来志向のネットワークニーズに応えながら「社会の創造力の循環を目指す」こと、そして「人と社会の創造力を改善する」ことをミッションとしています。その実現に向けて、デジタルイノベーションの事業活動全体を“共創・共生プラットフォーム”として発展させることを目標に掲げています。

**志や認識を共有できる
パートナーの皆様との
『共創』の推進が必要不可欠**

門脇 広平

What?

誰と何を 共創するのか？

当社は、パートナーとの共創の中心地としてイノベーションセンター「netone valley」を2023年5月に開設しました。netone valleyには共創に必要な設備や機器はもちろん、最先端の技術情報やコミュニティ、国際的な学術交流の機会提供など多様な有形・無形のアセットを揃えています。

そして、これらのアセットを活用して、さまざまな課題解決を目指すための共創推進プログラムが「netone Co-Creation」です。このプログラムでは、共創パートナーが思い描くICTで「実現したいこと」「解決したいこと」を明確にし、さらには「考え方」や「取り組み方」といった実現方法を具体化するために必要な枠組みとメニューを用意しています。あらかじめ進め方を定義しておくことで必要なアセットを効率的に組み合わせ、目的意識を共有した上で、課題解決に向かって支援できるところに特長があります。

本間『「netone Co-Creation」は、何度も失敗を乗り越えてつくり上げたプロセスです」

共創のプロセスでは、参加者の熱量が高まり議論も活発に交わされますが、議論の流れを整えながら本題に立ち返るために焦点を戻す必要もあります。そうした試行錯誤の繰り返しから「netone Co-Creation」は磨き上げられてきました。

また、共創の構想を固めていく前提として、お互いのゴールの明確化、合意形成に至るプロセス、この期間でここまで進めるといった目標設定も重要です。こうした経験から、中長期の視点でパートナーに寄り添うことを重要視しています。

門脇「私たちネットワンシステムズは1988年の設立以来、常に『中立』であることを大切にしています」

これまでにファシリテートしたプロジェクトの中には、最終的にお客様から「ネットワンが、私たちを一つのチームにしてくれた」という言葉をいただくほど、中立的な立場でお客様のメンバー同士をつなぐことができた事例があります。

本間『「ネットワーク機器のベンダーだけではなく、一緒に考えてくれるパートナーなんですね」という言葉がすごくうれしかったです」

このプロジェクトでは、当社の技術チームや営業担当者たちが現場に何度も足を運びました。そして、非常に



多くの拠点での作業を少人数で行っていることを体感することで課題に対する共通認識をつくり、お互いに熱量を高めていきました。

門脇『「泥臭く汗をかく」ところは、我々が長く続けてきたことであり『らしさ』です。現場に足を運んで認識を合わせ、お客様の状況や課題に至った背景を理解できれば、環境に即したアイデアを出すことができます」

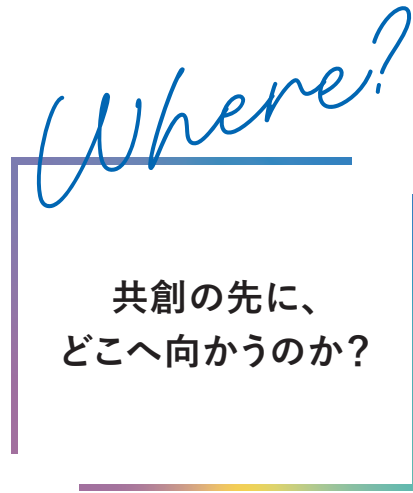
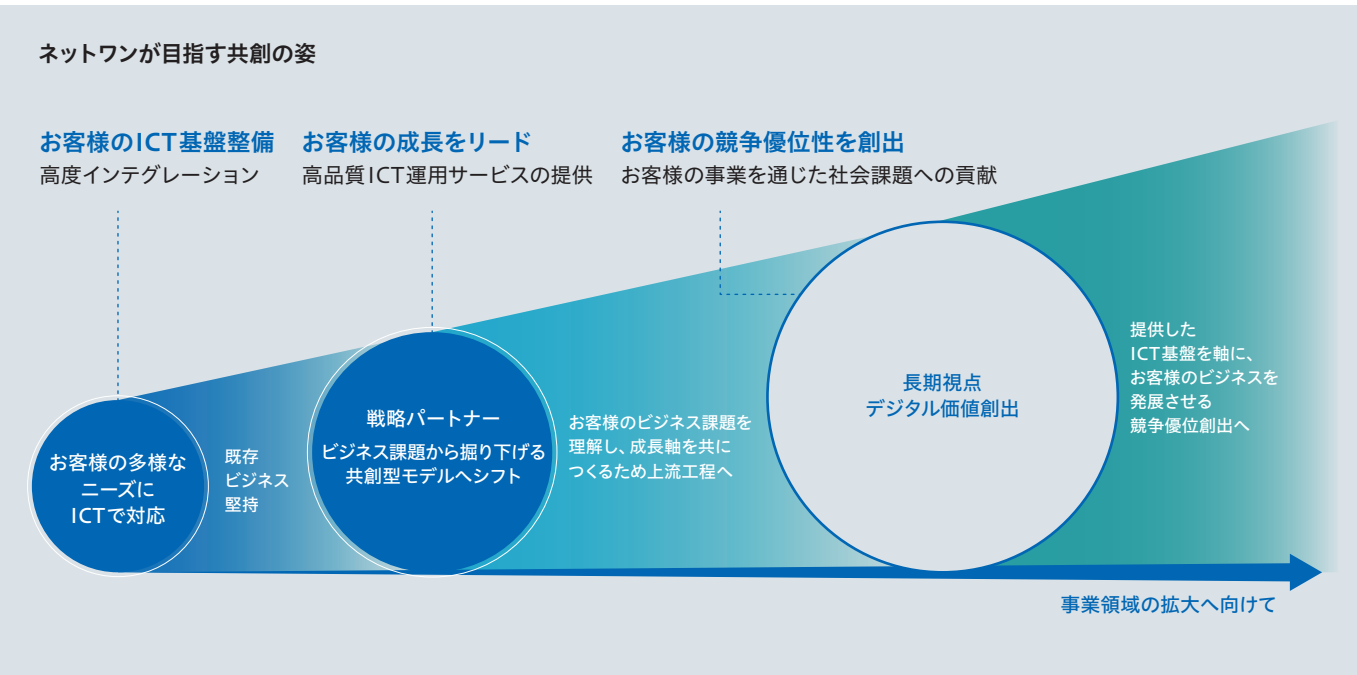
共創プログラムでは、当社が長年にわたって蓄積してきた「知財」も強みの一つとして生かされています。

『ネットワーク機器のベンダーだけではなく、一緒に考えてくれるパートナーなんですね』という言葉がすごくうれしかった

本間 あや

織原「お客様からは、私たちの技術力や目利き力など、伝統として受け継がれてきた知財に強い期待をいただいています。最近では、モノではなくて、アイデアを求められるケースが増えてきています」

中には「ネットワークの10年後を想像して提示してほしい」という相談が持ち掛けられることもあります。そのため、今後は「お客様の成長をリード」する戦略パートナーから、もう一段上の「お客様の競争優位性を創出」する共創の姿を追求しています。



netone valleyの開設以来、国内外から多くのお客様が来場し、その成果も徐々に見え始めています。先進技術の提案や異業種交流によって、新たな視点やDXに向けた発見、失敗事例からの気づき、新規事業のヒントが得られたという声も聞かれます。

その上で、今後さらに共創の輪を拡大していくためには、個人の暗黙知を組織としての共有知に転換し、参加者が同じ地図を見て議論できるような状態をつくっていくことが必要です。

本間「チャレンジの数だけ価値が生まれます。その体験はベテランから新人へと受け継がれ、未来への投資となり、それを受け取ったつなぎ手がまた新しい価値を上乗せする。netone valleyは成功だけでなく、前向きな失敗も資産として循環させる場所であってほしい」

織原「ネットワンは、新しいものを見つけて広げていく開拓者として成長してきました。さらなる成長のためには考えながら一歩ずつあゆみを進めてチャレンジすることや、新たな取り組みに意義を感じる文化を継承していくことが重要です」

門脇「私たちのこれまでの挑戦を伝承しながら、共創に向けた取り組みを前進させていきたいです。さらに、最新技術の最前線で活躍する方をお招きし、交流を図る『ITvalue+』のようなイ



ベント開催などをきっかけに、自分たちをもう一度見つめ直すことは、強みを再認識するために非常に重要だと思います」

これまで着実に拡大し、確かな進化を遂げてきた共創プロジェクトは未来へ向けて進化を続けます。そして、共創プロジェクトから生まれた新たなテクノロジーが次々と社会実装され、行動変容が進んでいった先に、人は、そして我々は何をすべきか、私たちは考えます。

本間「我々もお客様も、共創という取り組みに対して、ワクワクした気持ちを持てることが大事です。私も毎回すごくワクワクして、楽しみながら取り組んでいます。その雰囲気メンバー全員のモチベーションに必ず影響していくと思っています」

門脇「私は、新しくつくったものを社会実装まで至らせたいという想いがあります。共に生み出した価値で人々の生

活や行動に変容をもたらすことこそが共創であり、最終的な完成形だと捉えています。それによって、持続的な広がりを持てるようにしていきたいです」

織原「私も社会実装を目指したいです。共創プロジェクトやイノベーションを青写真で終わらせずに、自分たちで試行錯誤し続けて、最後までやり切るのがネットワンのあるべき姿だと思います」

門脇「今後、生成AIがどれほど高度化し人間の仕事を次々に代替したとしても、理想や未来について腹を割って語り合い、互いの熱量をぶつけ合いながら新しい未来を描き上げることは、人間にしかできない営みだと私は考えています。netone valley が日本はもちろん、世界中の変革者にとってその共創の舞台となり、挑戦の過程を発信するゲートウェイになれば、これに勝る喜びはありません。その実現のため、一日一日を大切に、多くの同志と全力で精進していきたいです」



自分たちで試行錯誤し続けて、最後までやり切るのがネットワンのあるべき姿

織原 卓司

03

未来へあゆむ

価値ある文化を守りつつ、
豊かな未来へ一歩を踏み出す



Values 価値観

People ——— 私たちは大切な人に誇れる仕事をします
Governance ——— 私は社会に評価される行動を取り続けます
Social ——— 私はお客様と一緒に、価値を創造し展開します
Environment ——— 私は未来を想い、未来の仕組みをつくります

WAY 行動指針

netone、一歩先へ

- 不祥事を忘れない
- お互いに半歩踏み込む
- ワクワクを広げる
- 誠実に丁寧に
- 失敗も成功も次への糧に
- 期待値を超えていく
- 心と体を大切に
- 進化し続ける「匠」

*WAY: 仕事をする上での考え方や判断・行動の基本を明文化したもの



一歩先へ 未来を創る企業文化



齋藤 純

東日本第3事業本部
第2営業部 第3チーム
マネージャー

塩屋 晶子

ビジネス開発本部
イノベーション推進部
技術開発チーム
エキスパート

小川 裕隆

東日本第2事業本部
第2営業部
部長

北本 大悟

ネットワークパートナーズ
セールスエンジニアリング部
第1チーム
マネージャー

赤澤 哲也

管理本部
人事部
副部長

当社グループの企業文化改革活動を推進してきた5名のメンバーが一堂に会した座談会。

各メンバーの活動への想いや信念をはじめ、根源的な当社グループのDNAや、継承すべき企業文化、そして当社グループのありたい姿について、熱い議論が交わされました。

1 企業文化改革活動に 込めた想い

— これまでの企業文化改革活動の
概要について教えてください。

赤澤 2020年にビジネスモデルや環境
の変化を踏まえ、従来のビジョンの再
編集を含めた企業文化改革活動の
ルーツとなるビジョン浸透活動がス
タートし、その活動を受け継ぐ形で
2022年にPurpose、Mission、Vision、

Values、そしてWAYからなる新しい
企業理念体系を策定しました。その後、
社内で募った有志による取り組みを開
始し、「共感・共鳴・共振」という企業理
念の浸透プロセスを打ち出しました。
これまでに自分自身が企業理念に「共
感」のフェーズに達することができ、現
在は他者の理念に基づく行動に「共
鳴」するフェーズにあります。今後は社
内での共鳴を超え、外部からも「理念
を体現している」と認識される「共振」

に進んでいくことを目指していきます。

— どのような想いで企業文化改革
を推進されてきましたか。

北本 私は、2020年からビジョンの再
編集に携わって以来、理念浸透メン
バーとして活動に参画しています。当
時の委員長だった竹下さんとの1on1
で「ネットワークをもっとよい会社にし
ていこう」という熱い想いに共感し、今も
活動を続けています。新卒で入社して

15年目になりますが、当社の助け合
う、チャレンジする、お互いに成長し合
うという文化が好きで、この会社に入
ってよかったと心から思いますし、
視座を高め、視野を広げることができ、
確かな成長を実感しています。

小川 2010年に中途で入社しましたが、
入社前に外から見ていたネットワ
ンは本当に強かったんですね。しか
し、徐々にネットワークの強さが薄れ
てきていると感じていたときに、企業
理念浸透活動がスタートしました。そ
こで「強いネットワークを取り戻す」と
いう想いで即座に応募しました。

塩屋 理念浸透活動に参画して2年が
経ちました。2024年度は「WAY伝播
チーム」として、改めてWAYを正しく
理解して、共通認識を持って次のス
テージに進んでいくための活動を行っ
てきました。活動に参画するまでは企
業文化をあまり自分事として考える
ことができていなかったのですが、自
分が推進する立場になったことで見方
が変わり、自分自身も成長できている
と感じています。

齋藤 会社がターニングポイントを迎
えていた2022年、私が当社に入社し
て10年目の節目に、視座を高く持って
全社的な取り組みに貢献できれば自分



自身も成長できると思って参画しま
した。2022年は全社活動メンバーと
してWAYのピクトグラム作成に携わり、
2023年以降は本部大使として施策を
検討し、本部内の企業理念浸透活動
を推進しています。

— 印象的な出来事や活動の中で工
夫したことを教えてください。

北本 2020年度にビジョンを再編集
し、新たに4つの行動指針を策定しま
した。その翌年にWAY策定プロジェ
クトがスタートしましたが、4つの行
動指針と新しく策定するWAYとの違い
や策定の目的を明確にすることに苦
労しました。WAY策定メンバーと議
論を重ね、4つの行動指針を「価値観
(Values)」へと位置づけを変更の上、
WAYを「行動指針」とすることを会
社に提言し、現在の企業理念体系の
かたちになりました。これはメンバ
ー全員がネットワークのことが大
好きで、もっといい会社にしたい
という想いがあったからこそ成し
遂げることができたと考えています。

小川 WAYは営業の仕事上でもと
ても重要で、8つのWAYを実践でき
ている人は優秀な営業として周囲か
ら認められます。そのため、私は
営業現場に対して、WAYの実践を
強制するのではなく、目的やメリ
ットを伝えるように意識しています。

塩屋 企業文化改革の施策検討にお
いて、どれか1つのWAYを実行す
ればよいのではなく、8つのWAY
すべてを自分事と考えて体現する
ことが重要だと考えました。そ
こで、社員全員がWAYを正しく理
解し、自分の行動と結び付けて
もらうための仕組みづくりとして、
WAYの成り立ちや込められた想
いについて紹介するページを開
設したり、



社内のポータルサイトのプロフィール
欄に「8つのWAYに対する行動宣言」
の項目を追加し、8つのWAYすべて
に対する行動を宣言してもらいま
した。8つのWAY「すべて」を実行
することが、企業文化を醸成・発
展させ、それにより当社の勝ち筋
に導くことができるという共通理
解を広めていくことができたと思
っています。

齋藤 活動メンバーになる前は、実
はあまり自分事として捉えること
ができていませんでした。この活
動に参画して初めて、WAYの一
つひとつの言葉に想いが込めら
れていることを知り、その想いを
浸透させていきたいと考えるよう
になりました。そして、WAYを目
にする機会を増やし、親しみを
持つてもらえるように、WAYを
ピクトグラムで表現する取組み
を進めました。その後、本部内
の企業理念浸透活動では、部
門間のコミュニケーション活動
をする際に必ず施策とWAYを紐
づけるように工夫しています。そ
れによりWAYの具体的なイメージ
を持ってもらい、行動の中で自
然に浸透していくように働き
かけています。

2 ネットワンの DNAについて

— 皆さんが考える「ネットワンらし
さ」をお聞かせください。

赤澤 企業文化改革活動を立ち上げる



と、自発的に手を挙げてくれる人が集まることは当社のよさの一つだと感じています。全社の活動はもちろん、各本部でも自発的に取り組んでいるのは本当にすごいことだと思います。私は理念を軸に活動する人たちを支える立場になりたいと思っているので、こういった活動に楽しみながら取り組んでもらえることがうれしいですし、自分も楽しいですね。メンバーは毎年入れ替わりますが、毎年カラーが違って、毎年前向きに突き進むパワーを持っています。これがネットワンのDNAそのものだと思います。

小川 当社の社員は、本当に真面目で、誠実で、何事にも逃げずに立ち向かって必ず完遂します。それこそが当社が



選ばれ続ける理由だと思っています。

齋藤 同じベクトルを向いたときのネットワンってものすごく強くて、格好いいと思っています。何事にも絶対逃げないし、一致団結してやり抜くエネルギーが本当にすごい。昔、現場で障害が起きたときに、先輩たちが一丸となって原因の特定と解決に向けて奮闘している姿がとにかく格好よかったことをよく覚えています。

北本 確かに、期限や目標が決まったときは特に強くて、そこに向かって必ずやり切るという推進力はすごいですね。**塩屋** 私も結束してまとまったときの行動力は、ネットワンらしさだと思っています。それに加えて、自由な空気感もネットワンらしさの一つだと思っています。手を挙げたら何でもチャレンジさせてもらえますよね。

齋藤 営業現場でも、まずチャレンジして頑張ってみようという風土があります。現場のアカウント営業とSEが、担当としてやってみたいことをアカウントプランとして発表する場はみんなに協力を仰ぐ場になっていて、そういう経験ができるのは本当に有益だと感じています。**赤澤** 企業理念浸透のための「Vision Day」というイベントでもボトムアップ

でアイデアが出てきて、アグレッシブな企画も結構多いのですが、止められることはありません。

北本 市場にいち早くタッチしていくのも当社の強みだと考えています。テクノロジーに対する先見性があった上で、やり抜いていく。経営統合後も、そうした当社のよい文化を継承して広めていきたいですし、もちろん相手のよいところも取り入れてアップグレードしていきたいと思っています。それから、社内では誰に対しても「さん付け」で、もちろん社長も「竹下さん」と呼びます。そのような風通しのよさも文化として残したいです。

3 これからのネットワンへの期待について

——「共感」から「共鳴」フェーズの移行に向けて、今後取り組んでいきたいことをお聞かせください。

赤澤 あるべき姿を目指していく中で、「相手を称賛していく文化」も育てていく必要があると考えています。ここ2～3年は称賛をテーマにして、サンクスカードの取り組みを進めていますが、まだ全社の2割程度しか活用されてい

ない状況にあります。共鳴とは、相手の行動に対して共感することなので、称賛が共鳴につながっていくように盛り立てていきたいです。

齋藤 部門を超えた称賛は本部の中でも伝えています。本部内のサンクスカードの利用者も増え、実績として現れてきました。2025年度も継続して推進していきたいですね。本部での活動は、今までマネージャー層が主体的に推進していましたが、2025年度からは若手や希望者を中心とした立候補制にしました。2025年度は、メンバーのやりたい、やってみたいという意見を吸い上げながら、新しい施策を検討しています。

塩屋 私は、ピクトグラムを用いた「WAY伝播ステッカー」を作成・配布し、WAYをより身近に感じ、伝播させる仕掛けをつくってきたので、WAYをベースに動く文化が自然に広まっていくよう取り組みたいと考えています。また、共鳴という観点では、一人ひとりが自発的かつ積極的に動いていくことによって、周りにポジティブな影響を広めていくことが大切だと思っています。

小川 WAY浸透には、いかに自分事として捉えられるかが必要だと考えています。メンバーとして活動することで、



当事者として理解が早まり、腹落ちもしやすくなります。より多くの社員に浸透を図るためには、活動に参加して感じたことを広く伝える人を増やすことが大切だと思っています。

北本 私も同感です。いつか社員全員が理念に関する活動に何かしらの形で関わることができれば、理念浸透がすぐ進むと思います。また、会社としての方向性も共有でき、Purposeの実現に向けても足並みがそろって考えています。

——最後に、今後の「ネットワンのありたい姿」をお聞かせください。

北本 私たちは、人とネットワークの可能性を見出して、人をつなぐネットワークを信じ、新しい技術を広めてきました。そして、新しい技術に挑戦するというDNAや、日本のICTインフラを築き上げてきたというプライドを持っています。設立以来、ネットワンが日本のICTインフラを支えてきたからこそ、今の豊かな日本があると捉えています。今後も豊かな未来の実現を牽引していく気概を持って成長し、進化し続けていきたいと考えています。そして、家族を含めて大切な人に誇れる会社であり続けたいです。

塩屋 私は、お客様から選び続けてもらえる会社でありたいと考えています。当社が選ばれる背景には、お客様と「人」としてつながりがあるかだと思っています。私が長く当社で続けてこられたのも人とのつながりがあったからこそなので、これからも人とのつながりを大切にしながら、その輪を広げていきたいですね。企業規模が大きくなることで、できることが広がり、事業を通じた



社会貢献もさらに大きな規模で実現できる可能性があると考えています。今後、よりよい未来の実現に大きく貢献できるよう邁進していきます。

小川 経営統合すると、物理層からアプリケーションまでを業界トップの品質で提供できる唯一無二の存在になり、圧倒的な差別化ができると期待しています。一方、企業文化については、この数年間で変わりました。以前は個人の力が強かったですが、今は一人の力ではなく、お互い協力し合うことで個人の力が集合体となり、組織としてより強い力を生み出せるようになりました。こうした改革による変化は当社の新たな強みになっているので、経営統合後も企業文化改革活動を根強く継続していきたいです。

赤澤 私たちの事業は、ICTによる多様な社会変革の下支えとなってきました。これからもそうした革新を支えていくためには、多様な人が集い、活躍できる会社になることが重要です。そして、その人たちが未来を支える人財になり、振り返ったときに「私たちが日本のICT社会を支えてきた」と誇れるような会社にしていきたい。ただ、多様性も必要ですが、企業理念という会社の軸になるものは外してはいけません。私たちの軸であるPurposeに共感してもらい、一緒に豊かな未来を支えていく。そんな会社にしていきたいです。

株式会社オブテージ
技術本部 技術イノベーション部 部長



藤田 大作 様

当社は、ネットワンシステムズ様とデジタルツインを活用した共創プロジェクトに取り組みました。共創を推進するプログラム『netone Co-Creation』の枠組みにより、組織の壁を越えて技術とナレッジを融合させ、新たな価値を創造できました。会社や部門、年代を超えた議論は、当社の若手社員にとって貴重な経験となり、イノベーションには多様な視点や人との繋がりが不可欠だと実感しました。

今後も共創による新たな価値創造に挑戦していきたいと思います。

これからの ネットワンに 期待すること

シスコシステムズ合同会社
社長執行役員



濱田 義之 様

ネットワンシステムズ様は高度な技術力とお客様に寄り添う現場力を強みに、シスコジャパン創業時より30年以上にわたり社会と企業の課題解決を通じて、日本社会の変革を支えてこられました。近年では複雑化・多様化する顧客ニーズに応えるべく、次世代のデジタルサービス実現に向けて着実な変革を遂げられています。

今後も共に挑戦を重ねながら、日本の持続的成長と社会変革へのさらなる貢献を果たしていけることを心より期待申し上げます。

株式会社大分フットボールクラブ
社長室 室長



内野 良純 様

2009年よりユニフォームスポンサーとして長年のご支援、誠にありがとうございます。2020年からはソーシャルアクションパートナーとして、共に社会貢献活動や地域課題解決に取り組み、2024年には産官学連携で“人々の交流を促し大分を元気にする”をテーマとしたソーシャルアクションデーを開催しました。今後も持続可能な社会の実現に向けて共に歩んでいきたいと思っています。

培ってこられた専門性と技術力を基盤に、ネットワンシステムズ様のさらなるご発展を期待しています。

国立大学法人弘前大学 副理事
情報連携統括本部 情報基盤センター センター長
大学院理工学研究科 教授



弘前大学
HIROSAKI UNIVERSITY

今井 雅 様

大学における教育・研究活動を支える情報基盤システム及び学内LANの安定運用は、円滑な業務遂行や学術成果の創出に直結する極めて重要な要素であり、保守・管理にご尽力いただいているネットワンシステムズ様には深く感謝申し上げます。

ネットワーク上の脅威の多様化により、これまで以上の警戒と対策が求められる中、今後も専門的な知見と迅速な対応力をもって、安全かつ信頼性の高い運用体制の維持・向上を引き続きお願いいたします。

パロアルトネットワークス株式会社
代表取締役会長兼社長



アライ ヒロシ 様

共に創る未来 期待の先へ

ネットワンシステムズ様は、高度な技術力と深い顧客理解で日本市場を常にリードされています。特に、最新のセキュリティ技術をいち早く取り入れ、実運用に落とし込む姿勢に大いに刺激を受けています。当社との協業では、Cortex®XDRのサービス提供をはじめ、クラウドセキュリティ分野で多くの先進事例を共に実現してきました。

今後も、日本のサイバーセキュリティの未来を共に切り拓くパートナーであり続けたいと願っています。

学校法人 法政大学専門職大学院
イノベーション・マネジメント研究科 准教授



法政大学ビジネススクール
イノベーションマネジメント研究科 准教授
Hosei Business School of Innovation Management

大塚 有希子 様

ネットワンシステムズ様には学部向けのICT講座や専門職大学院向けのビジネス講演を継続的に提供いただき本校学生の人材育成に貢献していただいております。2025年度からは、さらなるパートナーシップ強化の一環として、実在の企業を対象とした共同プロジェクトもスタートすることができました。

今後は本校とネットワンシステムズ様がICT+ビジネスでさらなる共創を実現していくことで、産学連携を強化し、社会貢献とイノベーター育成を加速させることを大いに期待しております。

絶え間なくつながる“価値連鎖” 一人ひとりの挑戦が、組織を変え、未来を拓く

インプットを受け止め、磨き上げ、創意工夫を重ねることで、より価値の高いアウトプットが生まれます。
そのプロセスの積み重ねが、私たちのあゆみであり「価値連鎖」です。

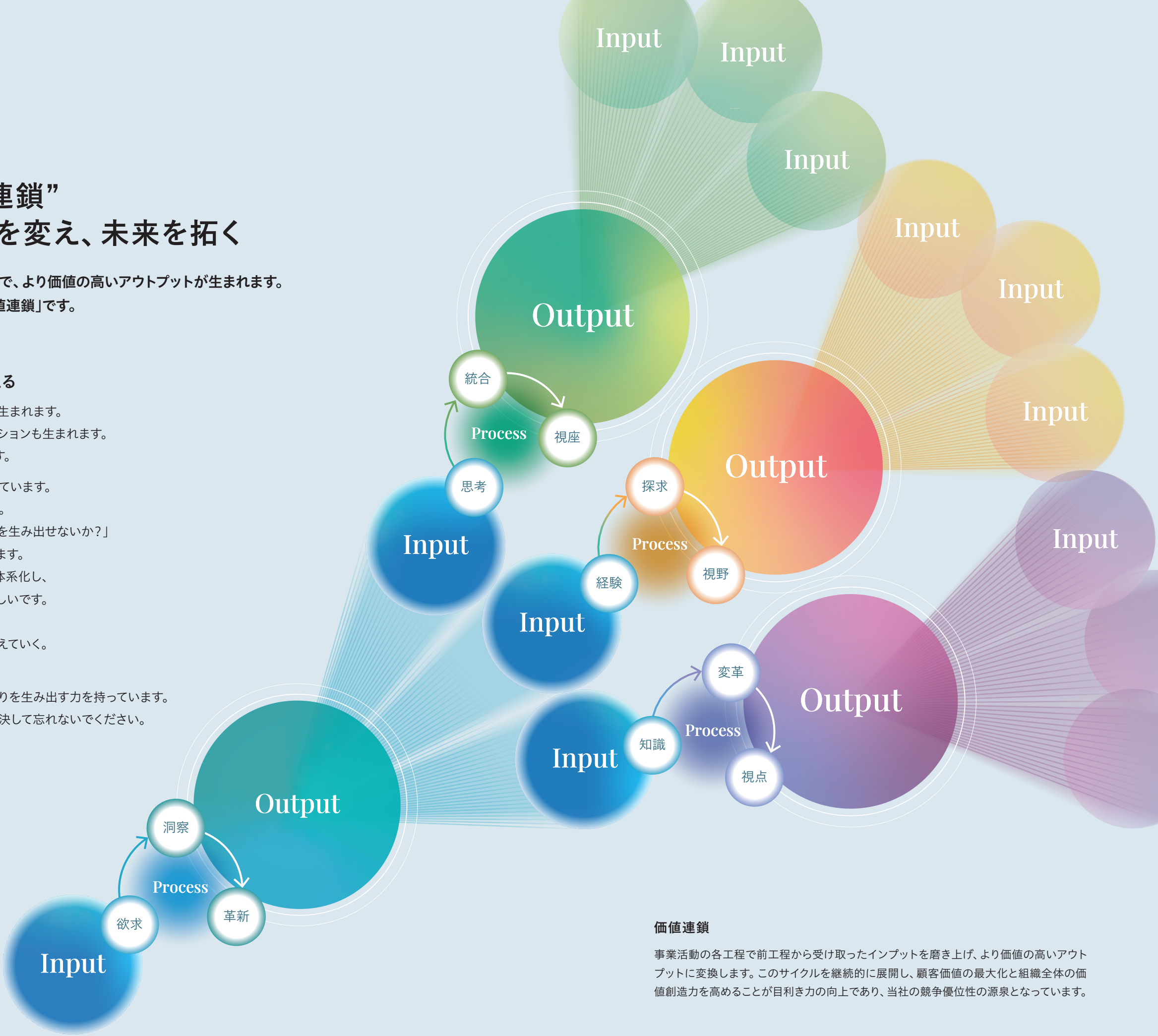
人と人のつながりが価値を生み出し、社会を変える

価値は一人で生み出すものではなく、多くの人との連鎖によって生まれます。
プロセスを磨くほど効率性と品質が向上し、その過程でイノベーションも生まれます。
つながる輪が広がることで、価値はさらに大きく成長していきます。

このように価値の連鎖は誰もがプロセスに関わることで成り立っています。
現状で満足すれば、そこで価値の連鎖は断ち切られてしまいます。
「もっと工夫できる余地はないか?」「より短時間で質の高い成果を生み出せないか?」
こうした一人ひとりの改善の積み重ねが、プロセス全体を強くします。
プロフェッショナルである皆さんには、既存の知識を「型」として体系化し、
それを打ち破って新しいことに挑戦し、新たな価値を創造してほしいです。
恐れず立ち向かい、新たな「型」を生み出してください。
そして、つながりを大切にしながら次の人がその「型」をさらに超えていく。
この連鎖こそが成長の源泉です。

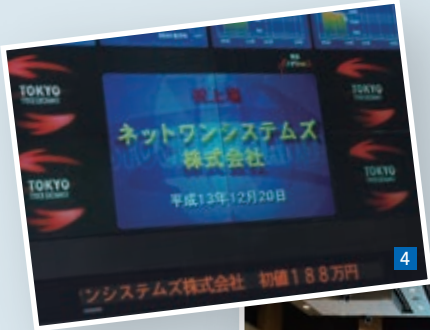
私たちは、ネットワークインテグレーターとして、人と人のつながりを生み出す力を持っています。
現在の成功が多くの人とのつながりによって築かれていることを決して忘れないでください。
社員一人ひとりが価値連鎖をさらに磨き上げ、
社会へと広げていくことで、私たちの可能性はさらに広がります。
皆さんと共に変化に挑戦し続けることで、
豊かな未来を築いていけることを期待しています。

代表取締役
社長執行役員
最高経営責任者 (CEO)
竹下 隆史



価値連鎖
事業活動の各工程で前工程から受け取ったインプットを磨き上げ、より価値の高いアウトプットに変換します。このサイクルを継続的に展開し、顧客価値の最大化と組織全体の価値創造力を高めることが目利き力の向上であり、当社の競争優位性の源泉となっています。

写真でたどる、ネットワンの軌跡



1. 1988年 ネットワンシステムズ初の会社案内

2. 1992年 業界初のリモート監視サービスを提供

3. 1999年 新卒向け会社案内より
若かりし日の竹下社長

4. 2001年 東京証券取引所 市場第一部に株式を上場

5. ネットワンミュージアム
当社の沿革と共に当時の取り扱い商材を展示

6. 2005年 天王洲アイル時代のテクニカルセンター

7. 2008年 20周年の企業広告

8. 2013年 本社を東京・丸の内へ移転
9. 2014年 “超”垂直統合型アプライアンス製品
「EVO:RAIL」

10. 2017年 ファミリーデーでビデオ会議体験

11. 2020年 大分トリニータホーム戦でネットワン主催
イベントを実施、スタジアムにロゴが大々的に掲出

12. 左: ネットワンのマスコットキャラクター
「コアルータン」
右: 大分トリニータのマスコットキャラクター
「ニータン」

13. 2025年2月18日 ネットワンシステムズ上場最後
となる臨時株主総会

編集後記

本企画は、当社が設立後37年にわたり築いてきた価値と、豊かな未来に向けて挑み続ける意志を言語化し、受け継いでいくことを目指しました。

今回の取材や寄稿を通じて、社会課題の解決に取り組む現場力や、豊かな未来への熱意に触れ、最後までやり抜く意志と、将来を見据えた情熱を感じました。

当社は今、これまでに大切にしてきた文化を未来に伝えながら、次のステージに挑む、転換期を迎えています。この変化の中で、ステークホルダーの皆様から寄せられる期待こそが、挑戦の原動力です。その期待に応えるべく、私たちは人とネットワークの可能性を信じ、変化の先に広がる未来を皆様と共に描く存在であり続けます。

最後に、取材や寄稿にご協力いただいた皆様にお礼を申し上げます。そしてこのレポートが将来にわたりネットワンのDNAとして受け継がれることを期待しています。

ネットワンシステムズ IRチーム一同



企画・編集・制作メンバー

会社概要 (2025年3月31日現在)

設立	事業内容
1988年2月1日	世界の最先端技術を取り入れた情報インフラ構築とそれらに関連したサービス及び戦略的なICT利活用を実現するノウハウの提供
資本金	
122億79百万円	
従業員	
2,661名	
本社所在地	
〒100-7025 東京都千代田区丸の内二丁目7番2号 JPタワー	

Brand Story



「匠」の字を意匠化したロゴマーク

ロゴマークは当社の「匠の技と心」を意匠化したものです。優れた技術でさまざまな素材をすり合わせ、使いやすいものに整えた上でお客様にお届けするという、日本ならではの「匠の技と心」を目指す理想像としています。当社は、ネットワークをつなぎ、人と人をむすび、互恵の心でお客様とお互いの価値を高め合うパートナーであり続けます。

net one report 2025

発行	著者
2025年9月30日	ネットワンシステムズ株式会社
企画・編集	制作
管理本部 広報・IR部 IRチーム	株式会社ブレンセンター
村元 裕二、西田 武史、内田 亮、今村 友美	

Special Thanks
「これからのネットワンに期待すること」にご協力いただいた皆さん
榎本 博一さん、平山 大志さん、嶋形 直樹さん、相原 正彦さん、石谷 憲弥さん、兼松 智也さん、西嶋 孝夫さん、風間 純子さん (順不同)

表紙デザインについて
当社グループが、ネットワーク技術で縦横無尽に可能性を切り拓いていく姿を、コーポレートロゴの特徴である丸みのある曲線で表現しました。多彩な色は、多様な価値観を尊重し、共に課題解決を目指す当社グループの企業風土を示しています。